# 総　　括

## 研究目的

脳障害児の早期発見は乳児健診における主要目的の1つである。所が実際には検査手技が標準化されていないため，乳健の場において脳障害時の早期発見が必ずしもスムースにおこなわれてはいない。我々は乳児期を通じてみられる姿勢反射のうちから，脳障害早期発見のために最も有効と考えられる検査項目を選出し，その反応についてテスト方法，判定基準を標準化し，実際の乳児健診に役立てるのを目的とする。

## 研究方法

乳児期を通じてみられる姿勢反射のうち次の条件に合う検査項目を選択し，その1つ1つの検査について研究員の臨床経験，各個研究をもとにして，テスト方法，判定基準を各月令別に標準化した。なお53年度は検査項目の選出と乳健における有効性について主に検討した。

検査項目の選択条件

① 検査手技が簡単

② 検査手技が安全

③ 判定が容易

④ 検査所見にある程度の診断的意味が持てる。

⑤ 乳児の状態により検査成績があまり左右されない。

## 研究結果

1）検査項目の選出

姿勢反射のうち先に挙げた条件のものとして Vojta反射，vertical suspension，traction response，Landau reflex，parachute reflexの5つの姿勢反射を選出し，各々について実際の乳健の場においてテストとして有効かどうかを検討した。

2）乳健におけるこれらテストの有効性について

(1) Vojta反射

a）問題点及び提案

① 瞬間的にいくつかの要素を判定しなければならないので判定に熟練を要する。

② 手技が乱暴で母親に危険感を与える恐れがある。

③ 乳児期早期ことに生後2カ月頃迄は反応にvariationが多く，pseudopositiveがみられ易い。

④ 第2相の屈曲がほどけてくる時期に，下肢が伸展してくる状態が，順を追って経過を観てていないと，異常か正常か判定に困難なことがある。上肢の屈曲も第2相を過ぎてもなかなかほどけないものがある。

⑤ 体幹のそりをみるだけでもよいのではないか，すなわち立ち直り反射がでる以前と以後の

状態ぐらいに大きくわけたら

⑥ 3～4カ月でVojtaでは下肢を伸展するぐらいしかチェックできないが，Vojtaで伸展しているなら他のテストでも伸展しており，特異的ではない。

⑦ 未熟児，新生児，hypotoniaのある乳児ではただ横に軽く倒すだけで判定可能である。

b）判定：現在の所，Vojta反射は乳健において常時おこなうには不適当である。

(2) Vertical suspension

a）問題点及び提案

① 反応が下肢が伸展したり，屈曲したりして一定でなく判定が困難。

② このテストで異常がみられれば，traction responseなどでも異常がみられ，テスト特異性がない。

③ つま先を何回もつかせた方が痙直をみるには有効。

④ 下肢のみでなく上肢の回内，手の状態も診たらどうか。

b）判定：何か異常があった時におこなえば良いテストで常時やらなくてもよいのでは。

(3) Landau reflex

a）問題点及び提案

① 水平に片手で乳児を支えるという手技が易しいようで，なかなか難かしい。

② 随意が出現してくる4～5カ月以後になると興味により顔の挙げ方がことなり判定が困難となる。

③ この反射で異常のものは，他の検査でも異常のことが多く，他のテストで代行できる。

b）判定：単に姿勢としておこなうにはよいがLandau反射として別個に常時乳検でおこなうには不適当と思われる。

(4) Traction response

a）問題点及び提案

① 名称について：traction responseは上肢をtraction索引した時にみられるおきあがる反応で，反射や反応を透るかに越えたものである。これを反射，反応と呼ぶのはおかしい。Vojtaはtraction versuchとし邦訳は引きおこし試行としてある。Andre-Tho-mas，Illingworthはrull to sitとしている。traction responseを引きおこし反射とせず，引きおこし検査，或は引きおこしテストとしたらどうだろうか。

② 手技について：検者の指を手掌に入れ手を持って引きおこすか，3秒かけて引きおこす方法，45度でとめて反応をチェックする方法，1度引きおこしてからもう一度45度近く迄戻し反応を確しかめる方法などがあり，手技が一定していない。

③ 判定について：45度の状態でチェックする方法，完全に引きおこした状態で判定する方法，引きおこす時にどのくらい迄引きおこすと頸が体幹と平行となるかの方法などがあり一定していない。

④ Traction responseは手技，判定法も現在の所統一されていないが，テスト方法としては安全で，乳健で使用するのに最も適しているテストである。

⑤ この反応1つを習得すると，今迄述べた他の反応と同様，又はそれ以上の情報が得られる。

⑥ 7～8か月頃になると判定に多少の問題はあるがそれ以前のテストとしては最高である。

a）判定：乳児健診における脳障害早期発見の姿勢反射としてはtraction responseが最も適していると考えられる。

(5) parachute反応

a）問題点及び提案：

① 乳児期後半には適しているが，前半にはテストできない。

② Vojta，traction，Landauなどの姿勢反射が意味を持てなくなる乳児期後半のテストとしては良い検査法である。

③ 考えられる程，危険はなく安全である。

b）判定：乳児期後半のテストとしては有効である。

（附） 姿勢反射と共に腹位，背臥位，立位，座位などの姿勢，自発運動そのものが脳障害児の早期発見に有用である。

## 結　語

幾つかの姿勢反射のうち，乳健において脳障害児早期発見に適した反応としてtraction responseとparachute反応の2つが挙げられる。traction responseは乳児前半～中期にかけて，parachute反応は乳児期中期～後半にかけて有効である。この2つの反応に加え腹位，背臥位，座位，立位などの姿勢そのものと，自発運動が異常の判定に役立つ。

各個研究

1. traction responseの臨床的，表面筋電図学的研究　前川　喜平
2. 乳児の姿勢反射，反応の発達とその機序，乳幼児の逆懸垂位の反応　北原　佶
3. 乳児期早期における脳障害児早期発見に関する研究……Brajelton　新生児行動評価尺度の胎令に伴う変化　黒川　徹
4. 姿勢，反射による脳障害児の早期発見に関する研究……主に脳性麻痺の診断におけるtraction responseの意義について　児玉　和夫

参考資料


① 昭和53年度，厚生省心身障害研究報告
「精神身体発育よりみた心身障害児の早期発見に関する研究――神経学的発育」

② Y.Ochiai，K.Maekawa：Clinical and Electro myographic Analysis of traction response。
Jikei Medical Journal 25；21－30，1978

③ 前川喜平：写真でみる乳児健診の神経学的チェック法　南山堂，東京　1979

④ 北原佶，有馬正高：小児の姿勢(5)－引き起こし反応。小児科診療　41：112～113，1978

⑤ 北原佶，有馬正高；小児の姿勢(6)－引き起こし反応，小児科診療41：242～249，1978
⑥ 北原佶，有馬正高；小児の姿勢(7)－腹臥位懸垂，小児科診療41：380～386，1978
⑦ 児玉和夫：Vojta法による診断の諸問題，小児科診療40：802～810　1977

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究目的

脳障害児の早期発見は乳児健診における主要目的の１つである。所が実際には検査手技が標準化されていないため,乳健の場において脳障害の早期発見が必ずしもスムースにおこなわれてはいない。我々は乳児期を通じてみられる姿勢反射のうちから，脳障害早期発見のために最も有効と考えられる検査項目を選出し,その反応についてテスト方法,判定基準を標準化し,実際の乳児健診に役立てるのを目的とする。